

天竜川下流平野の島畑形成に関する 歴史地理学的考察

岩崎 公 弥 *

I はじめに

天竜川下流平野一帯は、わが国でも有数の島畑分布地域である。しかし今日では圃場整備や土地改良事業によって、その島畑も昔日の景観を失った。島畑とは、水田の土を掻き揚げてその結果周囲の水田面より70~100cmの比高を持つに至った畑をさし、恰も水田の海原の中に点在する島の如き景観からこう呼ばれている。かつて静岡県についての研究を行った米国人地理学者G. T. トレワース¹⁾は、低い面を占める稲と小孤山(small butte)の如く隆起した無数の小地片上の灌漑をしない作物とから成る二層景観(two-storied landscape)としてこれをとらえている。トレワースはこの島畑の成因について触れ、島畑が河川に近接して分布するという認識や農民に対する聞きとりなどから、洪水によって砂礫に覆われた水田を復旧するために、被覆土砂を水田の一部に積み上げ後にそれが平坦化されて島畑が形成されたものと考えた。簡単に言えば、トレワースは「洪水起源説」を主張したのである。これに対し、竹内常行²⁾は、トレワースの島畑分布認識の誤りを指摘し、天竜川下流平野をはじめ各地の平野にみられる島畑の成因を、地表勾配の極端な緩やかさ、小さい地表の起伏、乏しい用水などの地域的条件に加えて、わが国古来の伝統たる水田重視策の結果であると考えた。

以上の両説をふまえつつ、本論では後者の竹内
*愛知教育大学地理学教室

説の支持・補強を意図している。そしてさらに、トレワース、竹内両氏において十分な言及のない歴史地理的視点から島畑形成の要因を推測してみたい。

II 調査方法と島畑分布の測定

調査は1983年7月22日から同27日にかけて実施した。浜北市、磐田市、豊田町、竜洋町の各市町村役場や浜松市立中央図書館、磐田市郷土館などを訪れた。各市役所において、昭和32年当時作製の3,000分の1地形図³⁾の閲覧ないし借用をし、これを基本図として、これに一辺500m四方のメッシュをかけた。そして各メッシュ内の島畑の数を計測することとした。その際の基準としては、畑の周囲が全て水田に囲まれるもの、あるいはその大半を水田によって囲まれるものを島畑とした。なお浜松市域及び磐田市域のこの島畑計測作業については、愛知教育大学地理学教室の野外実験実習の学生15名の協力を得た。こうして得られた各メッシュ毎の島畑数を5万分の1の地形図上に転記し、島畑分布密度等値線図を作った。それが図1である。以下この図をもととして微地形や土壌・水利との関係に言及し、古文書に認められる島畑記載に関しても考察を加えることとする。

III 天竜川下流平野の自然的・人文的条件 と島畑分布の関係

微地形・土壌条件との関係

天竜川下流は扇状地をなし、その平均縦断勾配

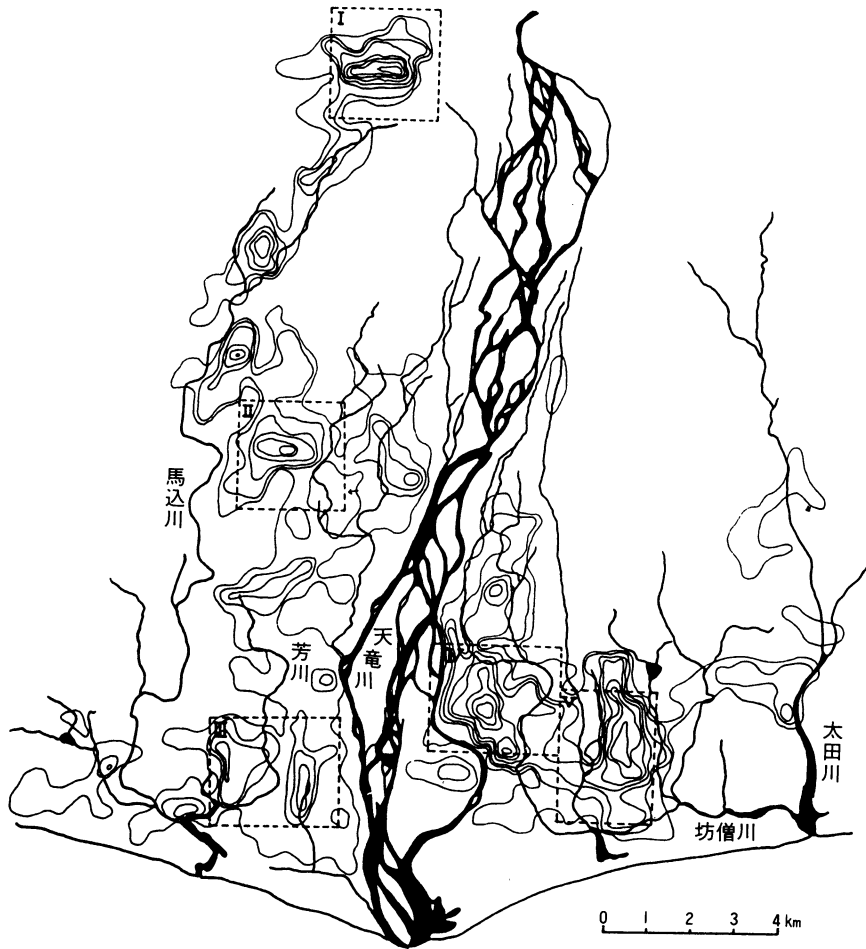


図1 天竜川下流地域における島畑密度等値線図

但し等値線の間隔は20、
 水系網は明治32年5万分の1地形図による。
 I～Vの点線で囲んだ区域は、図2の地形
 分類図に対応する。

は約2.2%で、東海道地域の扇状地の中ではもっとも緩勾配である⁴⁾。天竜川扇状地の基本的な微地形単位としては、旧中州(砂礫堆)、谷底平野(後背湿地)、旧河道(網状流跡)の3つがあげられる。もちろんこのように網状流跡とその間にはさまれる島状の旧中州とが作る微地形は、東海道地域の扇状地に限らず、日本の緩勾配扇状地では例外なく認められる。しかしながら天竜川において扇状地という形態に当たるのは、河口より10~12km程

度以北の地域と言われる⁵⁾。したがって天竜川下流平野の基本的な地形地域は、上流よりこの扇状地、自然堤防地域、砂丘地域に区分けられる。そして島畑の分布地域は主として、自然堤防带状地域に相当している。

さて図1中の島畑高密度分布地域の地形分類を示したものが図2である。この図をもとに各地域の地形及び土壌の状況についてみておきましょう。

まずI地域は、浜北段丘上の島畑地帯である。



「土地分類基本調査 磐田・掛塚」による

図2 島畑高密度分布区域の地形分類図 (I~Vの区域は図1に示す)

ここは主に扇状地、谷底平野及び砂礫質台地より成り、水田は扇状地及び谷底平野部に存在する。このうち特に島畑分布が顕著に認められるのは、ほぼ谷底平野と砂礫質台地の境界部あたりである。傾斜は南に約4%、海拔はほぼ20m程度で、天竜川の洪水の被害を受けることはない。

II地域は、広い谷底平野(後背湿地)の地域に当たっており、天竜川下流西岸地域としては連続した広い水田地帯である。本地域を構成する土壤は、宝田統と呼ばれ泥炭層、黒泥層、グライ層などを持たない細粒質の土性を示す。また礫はほとんど存在せず、グライ土壤にくらべ乾燥が進んでおり、大部分乾田となっている。この地域は周囲を自然堤防にはさまれ、後背湿地状を呈しているが、島畑分布は自然堤防地帯に近づくとしたがって密になるという傾向を持っている。

III~Vの地域は、いずれも天竜川低地下流部の海拔5m以下の地域で、勾配は0.7~0.8%ときわめて緩かである。図からも明らかなように、微高

地が多く分布し、その間を旧河道が走っている。そして島畑の分布ももっとも著しい地域である。IIの地域に比べると谷底平野(後背湿地)の占める割合は狭い。またこの谷底平野を作る泥土層も全般に薄く、一般には1m以内で砂または礫に達する⁷⁾。したがって一般に乾田地帯及び畑地帯となっている。さらにIII~Vの島畑地帯についてはほぼ共通している点は、表層地質においていずれの地域も砂を含むシルトより構成されているということである。そして砂礫地においては島畑の分布密度は概して低くなっている。中州状微高地を削りこんだ島畑地帯では、微高地面の畑地は細砂質であるが、水田では砂礫が浅く出てくる傾向も知られている⁸⁾。

逆にほとんど島畑分布のみられない地域としては、三方原台地、現在の浜北市の扇状地部分、磐田原台地とその南部に連続する泥炭を含む湿地帯、そして海岸砂丘地帯とその内側の湿地性の海岸平野の地帯などである。

水利との関係

図1よりほぼ共通して指摘されることは、島畑の分布が河川よりある程度離れた区域においてその密度を上昇させるという点である。これはかつてトレワースが述べた事実とは異なり、竹内の指摘と合致している。先述したようにトレワースの島畑形成の考え方は、洪水による水田の埋没→土砂の除去と水田復興→水田地帯内における畑＝島畑の形成→洪水を受けない島畑の有利性の発見→積極的島畑の造成、というものであった。このいわば「洪水起源説」をとる限り、島畑はむしろより多くの洪水の被害を受けたであろうと推定される河川の近くに多く分布しているはずであるが、実際にはそうになっていない。この点でトレワース説には疑問が生じるのである。たとえば図3のように、河川より離れしかも連続的に連なる島畑群の存在は、水源より遠い旧自然堤防の水田化の試みの結果として解釈する方が妥当かと思われる。

水利条件と島畑分布との関わりを強さを考えるにあたってもっと明白な事実、図4に示されている。ここは浜北段丘上の島畑区域であるが、竹内も指摘したように洪水を蒙ることのない地域であるのに島畑がみられる。したがって洪水と島畑との関わりは少ないものと考えられる。それよりもさらに重要な点は、水源を遠ざかるにつれて島畑の分布密度が高くなることである。この地域はかつて三方原台地末端の溜池や湧水にその灌漑水を依存した地域で、水源付近は深田と言われるほどであったが、水源を離れると水量の乏しさから灌漑水には不足する地域であった。さらに南の段丘上には水田はほとんどなく、果樹園や畑地となっている。このような地域においては、島畑は用水不足地の水田地帯において主として分布している。この事実こそ、島畑が水田地帯の水不足緩和のために考え出された土地利用形態であったことを想像させるものである。さらに言うならば、水



図3 浜松市小池町付近の島畑の分布
(黒くぬりつぶした部分が畑)



図4 浜北市尾野付近の島畑の分布
(黒くぬりつぶした部分が畑)

掛りの悪い土地に水をひき入れ水田化していく過程において考案され、造成されたものこそ、島畑ではなかったろうか。

IV 島畑分布の諸型と規模

島畑にもさまざまな形態が認められる。図5は代表的な島畑分布の状況を示したものである。

Aの型は、もっとも一般的にみられるもので、ほぼ長方形をなしており、その規模は大きいものでは長さ100m未満、平均的には30~40mの長辺を

持つ。分布の特色は、島畑と島畑との間が比較的離れており、田と畑が相半ばするといった感がある。

Bの型は、島畑の形態が極めて不定形で、しかもその規模もまちまちである。また島畑と島畑との間隔も大変狭く、水田帯は恰かも迷路のように入り組み、佐賀平野などにみられるクリーク網の如き感をいだかせる。ここで注目すべき点は、このように迷路状の水田帯でありながらそれがほとんど全て連続しているという事である。島畑に周囲を完全に囲まれるような水田の存在を認めない。まさにクリークの水のように、水田の灌漑水はこの狭い水田帯を伝って各所に送り込まれるのである。このような島畑分布地は、おそらくかつては比較的広い微高地として存在していたものと理解される。

C型は、前記AとBのいわば中間的な型であって、島畑の形状は不定形で規模もさまざまであるが、島畑は互いにある程度の間隔を持って分布している。

これらの他にごく一部にみられる型がある。この特徴としては、島畑は非常に細長い長方形で島畑間の幅も狭い。したがって水田帯は狭長な掘り下げ田となっており、戦後開拓の実施された竜洋町西平松・中平松地区にみられる。

これらの島畑分布の諸型や規模は、おそらく原

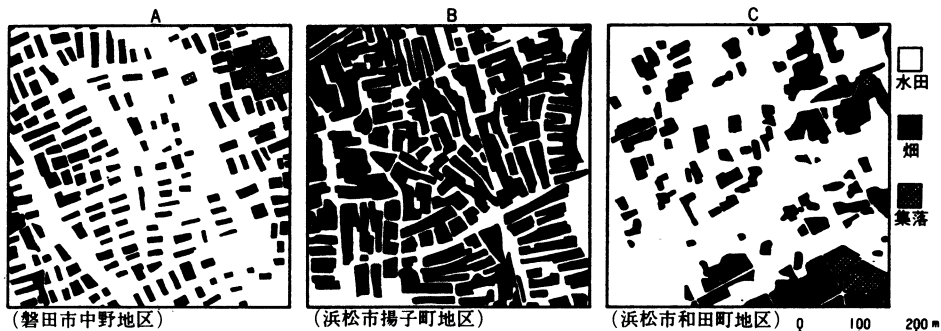


図5 島畑分布の諸形態

地形の形状（面積の広がり，周囲との比高）に規定されていると考えられる。

V 島畑の歴史資料的考察

検地帳記載にみる島畑

では，はたしてこのような島畑は，いつ頃からみられるのであろうか。史料としては，慶長9年（1604）の山名郡大原郷の検地帳にその例をみる事ができた。次にその一部を示すと次の如くである。

史料1では，田と畑とが交互に記載され，しかもともにその等級は同一である。つまり中畑に対しては中畠の如くである。またこれらが島畑であろうと考える根拠は，これら田・畑の名請人が同一であるという点である。この点は畿内の事例においても同様である⁹⁾。また史料2も同じ検地帳であるが，史料1とはやや記載方法が異なっている。史料2においては，島畑は田と畑とに分けて記載

されず，田あるいは畑として記載され，付記として，畑に対しては「堀田共ニ」，田に対しては「嶋共ニ」という表現が用いられている。つまりこれから，島畑そのものが，その周囲の水田とともに文字通り「島」として名請された場合と，逆に島畑も含めて「田」として名請された場合とが並存したことがわかる。したがって島畑とその周囲の田とは，ワンセットとして考えられていたことになる。ではなぜ島畑が田とされたり畑とされたりしたのであろうか。確証はないが考えられることとして，両者（田と島畑）の面積の大小によって記載方法が異なっていたのではなかろうか。つまり田の面積が島畑より大であれば田として，島畑の方が大であれば畑としてそれぞれ検地を行ったのではないかと考えられる。

池田荘立券状と島畑造成の可能性

以上の史料から，島畑が近世初期においてすでに存在したことが確認された。だがこの島畑の起源は一体いつ頃まで遡り得るかについては不明であるが，その可能性について少しふれておこう。

天竜川下流平野一帯には，平安末期頃の荘園として，松尾神社領たる池田荘をはじめとして，その南には所領が分散的な河曲荘（川勾荘），南西には一円的な頭陀寺荘，西には太神宮の蒲御厨，北西には美蘭御厨，羽鳥荘などが分布していた。このうち天竜川東岸の松尾社領池田荘については，藤田元春や谷岡武雄¹⁰⁾らの研究があるが，史料的には島畑に直接関わる記事は見い出されていない。残念ながら，池田荘の成立過程は不明であるが，平安末期には河道の安定を伴う開発の進展と荘園支配力の弛緩にしたがって，ようやく先ほどの隣接荘園（特に仁和寺観音院末寺頭陀寺荘や川曲荘）との堺論がおこってきた¹²⁾。それに際して作製されたものが，嘉応3年（1171）の池田荘立券状である。

〔史料1〕	
中田四畝式歩	同 ⑦七郎兵衛作
中畠三畝式歩	同 同分
中田老畝十六歩	同 同分
中畠式畝十式歩	同 同分
中田十五歩	地下の ⑧言兵衛作
中畠三畝十六歩	同 市兵衛作 ⑧
中畠式畝三歩	同 ⑦七郎作
中畠老畝十八歩	同 ⑧同分

〔史料2〕	
中田老反式畝歩	同所嶋共ニ ⑥六郎兵衛分 主作
中田五畝拾八歩	同所嶋共ニ ⑦七郎分 主作
中田老反三畝七歩	同所嶋共ニ 孫右衛門分 彦兵衛作
上田老反四畝拾式歩	同所 ③三郎馬分 主作
中畑三畝拾四歩	せんかう寺はり田共ニ ③三郎馬分 主作
中畑式畝歩	同所はり田共ニ 孫右衛門 主作
中畑五畝四歩	同所嶋共ニ 孫右衛門 主作
中田九畝歩	同所 左近七分 主作
	孫右衛門 彦兵衛分

さて、谷岡は論文の中において島畑についてふれ次のように述べている。¹³⁾「われわれのフィールド調査の結果によれば、これ（島畑）は既存の微高地を単純に切り開いて分離したのではなく、基底部に礫を敷き並べ、土を盛り上げた場合が多い。低湿地の干拓の際にも、水田の排水を促進させるために溝を掘り、その土を盛ることによって田島畑が形成される。つまり微高地はオリジナルではなく、人為的にいろいろと改変されてきたものなのである。いずれにせよかかる田島畑は、綿・桑そしてタバコなどの商品作物や、根菜を主とする野菜の栽培の発達に伴って盛行したところで、近世に起源をもつゆえ、池田荘のころの土地利用とは関係が少なく」と。ここでは、島畑が近世以降の商品作物生産の盛行によってその造成が促進されたと結論されている。しかし商品作物生産と島畑の形成とを結びつける証拠は全く存在しない。また島畑を近世起源とする根拠もない。池田荘はかつては条里も施行されるなど、開発は古い。条里施行地における島畑の形成に関しては、金田章¹⁴⁾の研究がある。これでは14世紀末以後には明確

に島畑の所在が確認され、一方12世紀以前の摂津・大和・山城・尾張などの事例では島畑は所在しなかったことから、13～14世紀頃に島畑景観形成の起源があることが指摘されている。池田荘の開発過程は、微高地上を畑や乾田として、網状の流路や後背湿地は年荒の多い水田としてそれぞれ開発されていったものと考えられてあり、島畑もその微高地上の畑地や乾田開発に伴って形成されたと考えることもできる。いずれにしても、本地域の島畑の起源を江戸時代以前に遡らせることは、他地域の事例ともくらべて可能なのではないかと考えられる。

さて次に平安末期の池田荘の開発状況についてみるとしよう。先の立券状より1町単位の土地利用状況を知ることができる。図6は、嘉応3年(1171)の池田荘立券状の記事を図化したものである。なお各郷保村及び里の現地比定は、谷岡によって試みられているが、判明するのは全体のほぼ3分の1程度である。図よりまず指摘できる点は、総じて水田開発がその中心をなしているということである。なかでも国富保などは水田開発中

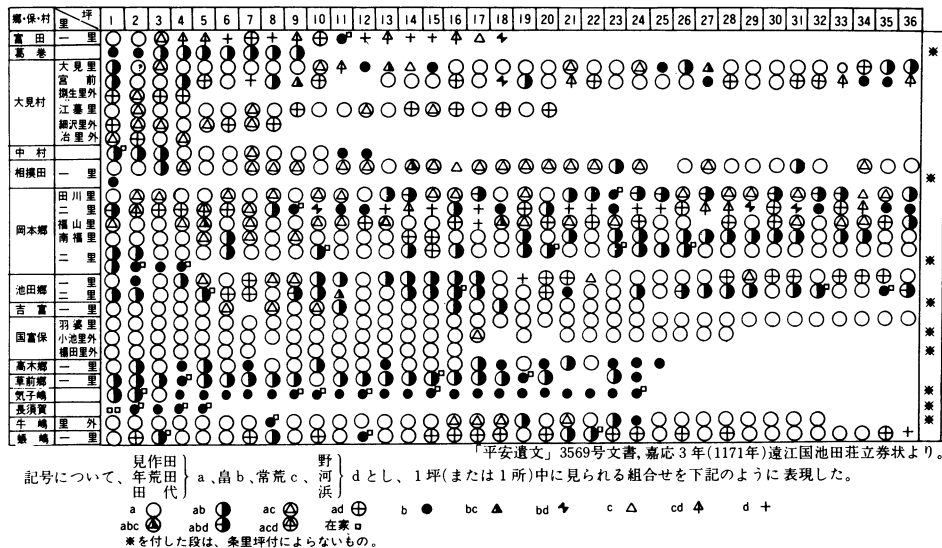


図6 遠江国池田荘立券状にみる土地利用状況

心の地区であったと言えよう。富田郷は全般に野となっており、現地比定では天竜川本流路に接し、また一部は現河道内に及んでいる点から、当時も未開地が多く分布していたと思われる。またこの時代には、池田荘の四至の記述から、天竜川は現在のそれよりもずっと東側を流れていたと解することができるが、おそらくそれは多くの分流から成り立っていたと考えられている。水田開発中心地に対し、気子嶋や長須賀の地区は逆に畑開発が中心をなしていた。これらは現在も微高地として存在しており、当時は在家の分布も多くみられるところから、小散村を形成していたと考えられる場所である。このような畑地や集落の適地となったのは、おそらく洪水を免れうる比較的高燥な地であったろうし、水田の適地は旧河道などの低い部分であったであろう。このような高燥な地は、水掛りの点で全面水田化は実現されなかったものの、一部の地域においては田と畑とが混在する地域も見うけられた。例えば、草前郷一里の地は、水田と畑とが非常に混在していたところである。この地区は谷岡の現地比定によって、ほぼその位置が明らかとなっており、今日の島畑分布との対応関係を見ることも可能である。草前（現在は草崎）郷の地区は、島畑分布密度も高く、今日においても田と畑とが混在した場所なのである。

谷岡の結論、すなわち平安末期においては開発が微高地を中心に行われ、低湿地にはさほど及んでいなかったとする点は、田385町に対し畠164町という値から圧倒的に水田に開発の比重があることがわかり、やや疑問が残るところである。水田地においても、数多くの年荒、田代などが見受けられるところから、それは多分に不安定なもの、あるいは開発途上の状況を示しており、全面水田化がなされているところはそう多くはない。しかし荘域全体にわたって不安定ながら広く水田開発のあとをみることができるのは、やはり当時の生

産の中心としての水田の開発が存在していたとの推測を裏づけるものである。

以上のことから、本地域の島畑の形成を次の如き、模式図によって説明したい。図7はそれを示したものである。図中aはもっとも低い部分で、主として水田作中心の地域であり島畑はみられない。bはやや微高地にあたり水掛りはあまり良く

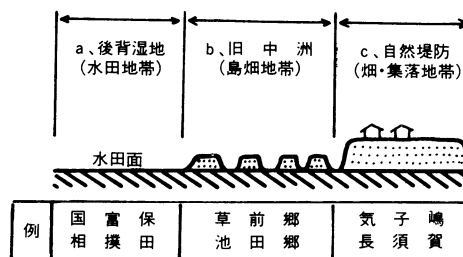


図7 天竜川下流地域の土地利用についての模式的断面図

はなく、水田造成のためには微高地面の掘り下げを必要とし、またそれが可能な地域で、今日多くの島畑がみられる。cはbよりももっと高く、集落の立地が多くみられるなど洪水に対しては安全性が高いが、土地が高いため水田開発には当初より不適な地域である。

もちろん、12世紀において今日みる如き島畑景観が形成されたかどうかについては不明である。つまりその当時の畑がすでに島状の分布をなしていたかについては、史料の上からの確認は出来ない。草前郷のように各1町四方の内部が、田と畑によって構成されてはいると言っても、それは溝状の水田が造成され、畑地は互いに連続しあっていて、島状にはなっていないかもしれないのである。

中世における畑の意義と島畑との関係

それではその当時の畑とは一体どのような意義を有していたのであろうか。図6からみると、在家の分布はすべて畑地のあるところに限られている。いわゆる「一町畠在家」と呼ばれる状況が多

く見受けられる。物資流通の乏しかった当時においては、生鮮野菜等は自らの農圃で自給せねばならなかったのが、集落周辺の畑地はその意味で重要な農地であったと言えよう。また当時、交易品として、麦や豆、胡麻、粟などの雑穀や芋、糸、絹、漆等の原料作物および農産加工品が含まれているが、生鮮野菜の類は見当たらない。ちなみに「延喜式」中の交易雑物にあらわれる遠江の生産物としては、胡麻子、大藪、千蕪、種蕪、芋、絹などがある。¹⁶⁾ 奈良・平安初期の太政官符はしばしば畑作の奨励を行っているが、それでも平安期の荘園面積の中心は水田耕地であった。それは、律令制下では畑は本来直接的な貢租対象地ではなく、田と異なって私有を認められた存在であり、またその評価も相対的に低いものであったためであろう。しかし中世後期になると畑の面積も増加の傾向をみせるなど、平安期の畑作奨励の効果がこの期に入って結実したものと言われる。尾張国においては、14世紀にはさまざまな畑作物が貢租徴収の対象となっていたことが知られ、また15世紀になると畑の評価は田に比べて遜色あるものではなく、田と同程度か時にはそれ以上の価値が認められていたとされる。¹⁷⁾ 金田はこの状況から、田の面積をせばめることになっても島畑を造成する背景としての経済的・社会的条件が整ったとみている。この考え方には、島畑造成以前においては水田として開発されていたところに畑の有利性の発生によって、水田が畑に変えられたということが、前提として実証されなければならないが、中世におけるこのような状況についてはかならずしも明らかとはなっていない。金田説は、畑の経済的・社会的有利性が島畑の発生を促したとするものであるが、微高地における水田開発の結果が島畑造成につながったとすれば、むしろ島畑形成の背景を水田開発との関係において考えた方が妥当である。したがって、島畑形成の条件として、畑の相対的

有利性の発生は、必然的なものとは言えないのではなかろうか。それは島畑の分布が、水源から離れた用水不足地において密である点からも、畑の積極的造成の結果とは考えにくいのである。

VI おわりに

島畑分布を主として用水不足という条件から考察し、その成因について推察を行ってきた。その結果、島畑は竹内の言うように水田拡張の一手段として、緩傾斜の水不足地においてとられた一つの開発形態ではなかったかとの結論に達した。またそれらを微細にみるならば、比高のそれほど大きくない微高地において島畑開発が可能であったことも指摘した。そして時代的には島畑の形成は、江戸初期の検地帳にも認められるが、さらに遡つて、12世紀末平安朝末期の荘園の開発においても、島畑の原初的な姿が認めうるのではないかとの推測を行った。したがって、島畑の起源そのものは、他地域の例からも明らかなように、中世に求められるなど、かなり古いように思われる。ただそれが、畑の有利性発生の結果による島畑造成なのかについては、疑問が残り、むしろそのような島畑が畑としての経済的有利性を発揮するのはもっと後になってから、すなわち江戸時代の商品作物生産の発展にともなってからではなかろうかと考える。

謝辞 本調査を実施するにあたり、現地の浜松市・浜北市・磐田市の各市役所及び豊田町・竜洋町の各町役場や浜松市立中央図書館・磐田市立図書館・同郷土館の職員各位には、旧地形図類や古文書等の閲覧に際し格別の御協力を賜った。また本学地理学教室の森山昭雄助教授には、扇状地関係の文献・地図類の提供とともに学問的御教示をいただいた。ともに紙面を借りて深く感謝申し上げる次第である。

注及び参考文献

- 1) Glenn T.Trewartha (1928) : A Geographic Study in Shizuoka Prefecture, Japan. A.A.-A.G.,Vol.18, pp.127-259.
- 2) 竹内常行 (1968) : 島畑景観の分布について, 地理学評論, 第41巻, pp.219-240.
- 3) 浜松市・浜北市・磐田市域については, 昭和32年度作製の3,000分の1地形図を閲覧することができた。これらの地形図は各市域単位に作製されたようでその記載には若干の差異がみられるが, 島畑の計測上問題はないと考えられる。しかし, 天竜川東岸の豊田町・竜洋町ではこれに類する地形図が見当らなかつたので, やむを得ず, 豊田町においては昭和32年6月8日から8月31日にかけて作製された1,200分の1の地図(大変大きな地図で, 手書きの彩色図)を利用した。また竜洋町においては作製年次は不明であるが, 明らかに土地改良事業以前のもので判定しうる1万分の1地形図を利用した。
- 4) 門村浩 (1971) : 扇状地の微地形とその形成——東海道地域の緩勾配扇状地を中心に——, 矢沢・戸谷・貝塚編『扇状地——地域的特性——』, 古今書院所収, pp.55-96。
- 5) 前掲書4)。
- 6) 経済企画庁総合開発局国土調査課編 (1965) : 『土地分類基本調査磐田・掛塚』, 土じょう各論, pp.1-58。
- 7) 前掲書6)。
- 8) 前掲書6) , 表層地質各論 pp.1-22。
- 9) 浮田典良 (1961) : 江戸時代～明治前期の摂河泉綿作地帯における土地利用形態——とくに, 「半田」を中心として——, 人文地理, 第13巻 第2号, pp.1-28。
- 10) 藤田元春 (1932) : 王朝末期の一農村 (松尾神社領遠江国池田荘), 歴史と地理, 第30巻 第2号, pp.1-23。
- 11) 谷岡武雄 (1966) : 天龍川下流域における松尾神社領池田荘の歴史地理学的研究, 史林, 第49巻 第2号, pp.35-65。
- 12) 前掲書11)。
- 13) 前掲書11) , p.41。
- 14) 金田章裕 (1976) : 条里制施行地における島畑景観の形成, 地理学評論, 第49巻, pp.249-266。
- 15) 前掲書11)。
- 16) 古島敏雄 (1975) : 日本農業技術史, 古島敏雄著作集 第6巻所収, 東京大学出版会, pp.173-182。
- 17) 前掲書14)。